

〔論説・随筆〕

## 信境>観境>語境>国境

大橋 秀雄



- ・昭和6年5月10日生まれ
- ・昭和29年東京大学工学部機械工学科卒業、Dr. Ing. (西ドイツ)、工学博士(東京大学)
- ・流体機械、流体工学の研究、特に非定常流、二相流関係
- ・東京大学工学部機械工学科

商社マンや企業の駐在員のように仕事上海外との往来が激しい方とは比べものにならないが、筆者の海外渡航は25回を越え、外国暮らしは長期短期通算すると4年余に及んでいる。大学の人間としては外国との付き合いが多い方だろう。国境を越えた人と人とのふれあいをテーマとするこの緑陰特集号に寄稿を求められたのも、そのような関係で何か面白い話を期待されたの事と思っているが、ご期待にそえるかどうか心配である。

人間の性格には、内向性 (introversion) と外向性 (extroversion) がある。もっとも両向性 (ambiversion) という言葉もあるから、その中間的な人もいるようだ。人と人とのふれあいのパターンは、だいたいはその性格のバージョンによって決まってしまう。陽性で外向的な人は、どこでも気軽に周囲の人と話を始める。一方、内向的な人は、見知らぬ人と話し始めること自体に大きな勇気が必要とし、ぎこちなくおずおずと近づきになる。しかしひとたびウマが合う人に巡り会うと、その付き合いは長続きするのが普通である。

筆者は生まれながらの内向性で、子供の頃は赤面症に悩んだものである。今でも大勢の人前で不意に意見を求められたりすると、ときどきふっと頭に血が上ってくるのを自覚するが、歳が歳だけに“あっ又赤くなった”と意識しながらも口では冷静に取り繕ってしまう。つくづく性格は一生変らぬものだ痛感する。このような性格ゆえに、筆者の外国人との付き合いはどうしても少数、長続き派になってくる。最初にドイツの地を踏んでから既に33年になろうとしているが、古い友達との交流も同じ齢を重ねている。この機会にそのような交友録の一、二をご紹介します責を果たすこと

原稿受付日 平成元年4月22日

も考えたが、今回は個別例でなく汎論を述べさせて頂くことにしよう。

\*

少なくとも筆者にとって、見知らぬ人と会話のきっかけを作り、相互に関心を示し合うためにはあるバリアを乗り越えなければならない。いまそのバリアを、国籍あるいは居住地が異なるがゆえの国境：言葉の違いによるコミュニケーションバリアとしての語境：体つき、髪、目、肌色の違いなど見かけの違和感に発する観境：宗教、政治ドグマなど信念の排他性に基づく信境に分けて分析してみよう。

\*

外国人との付き合いにおいてまず問題になるのが語境である。外国人であっても、例えば相手がテレビでおなじみのケント・ギルバートのように達者な日本語を操る人だったら、気安く会話が弾んでくることは間違いない。反対に一語も解しない相手だったら、にこにこして敵意が無いことを示すことはできても、それから一步も踏み込めない。欧米を歩いている間はそのような絶望的な体験をすることは少ないが、かつて中国で言葉の真空地帯を実感したことがある。言葉は何といっても理解の出発点である。

外国語を学ぶことは、永遠の坂道を登るようなものである。ちょっとした挨拶や意思表示ができることがまず必要であるが、それはほんの入口である。親しくなった外国の友達からよく聞くことであるが、日本から訪れる著名な学者と話をしていると、異様な気持ちになってくることがしばしばあるという。相手の専門学術における業績はいかに高く評価し尊敬しても、目の当人は、やれ天気が良いとか、ケーキが美味しいとか、幼稚園の子供のようなことしか言わない。高度に知的であるはずの人と子供じみた話ばかりするフラス

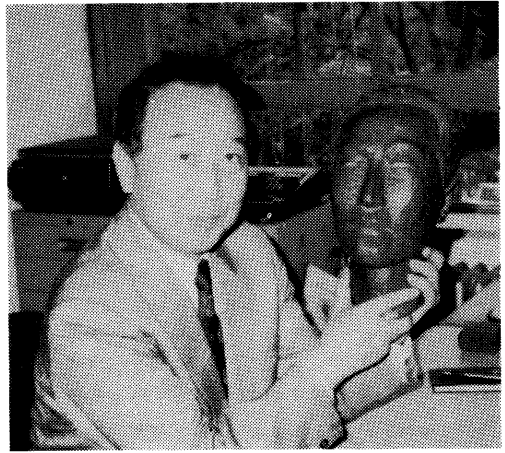
トレーションで、やるせない思いを噛みしめるという。自らを省みても、どきっとするような話である。もっともそういう御本人も、立場が逆転して日本語で話すことになったら、こちらが同じ思いをする番になるのである。言葉は、自分の意見や感情をはっきり表現できるようにならなければ語境を跨いだとは言いがたい。これは至難の技であり、永遠の課題である。

外国語が英語だけなら話はかなり簡単になるが、これが又多種多様である。外国語の修得には限度があるから、あれもこれもというわけにはゆかない。英語は必修科目、それ以上は余裕科目と割り切って、知的好奇心の赴くところにしがって勉強するより仕方がない。語境を克服し続けるためには、日頃のメンテナンスが必要である。話す機会、読む機会、書く機会を積極的に求めることはもとより重要であるが、筆者のモットーは、判らない単語に出会ったら必ず辞書を引くよう努めることである。覚えることと忘れることの競争を、それこそ死ぬまで続けなければならない。

\*

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」50年余の昔、川端康成の筆になる駒子は得も知れぬエキゾチズムをもって読者に迫ってきた。今ではトンネルを抜けるとそこには北海道がある。同じような土産物が並び、同じようなファッションに身をかためた女の子がたむろしている。そのうち、トンネルを抜けるとそこはイギリスだったということになる。人々の意識や行動を囲い込む境界が、村境から県境へ、県境から国境へと拡大し、今では国境をも越えたグローバルな発想がより多くの関心をひくようになっている。国境の拘束力は、一面から見るとほとんど霞んで見えるほど薄らいでしまったが、しかし今なおその一本の線を挟んで血で血を洗う抗争が繰り返りひろげられている。

国境に区切られて国があり、そこに言語、人種、宗教、歴史を共有する人々が暮らしている。国民性の国際相互比較は、どこでも好まれる話題の一つである。フランス人はこうだ、ドイツ人はこうだと大まじめな比較論が横行しているが、それは大きなばらつきの中の僅かな平均の違いを拡大して見せている感すらある。実際には個人のばらつきの方がはるかに大きいのである。筆者はかつて、あるロータリークラブの例会に招かれてドイツ人気質について話すよう頼まれたことがあったが、ばらつきが大きくて一概にはいえないと講



昔は若かった！ 33年前に「東洋の若者」と題するこのプロンズの首を作ってくれた彫刻家のチュービッツおぼさんとは、今なおふた月に一度は手紙をもらう間柄。

演したら不評だった。こういうときは、僅かの違いを誇張して面白おかしく話すものらしい。

ひとたび誰かを愛してしまえば、国籍の違いなど取るに足らぬことのように思われてくる。国籍が違おうと、肌色が違おうと、心が通い信頼できる外国人の方がイヤな同国人よりずっとウマが合う。個人対個人のレベルで見ると、国境のバリアは低くなる一方である。文化的にも人種的にも比較的同質な国が寄り集まっているヨーロッパでは、もともと国境の意識が薄く、隣国の人と結婚することなどは話題にもならない。3年後に予定されているECの統合がうまく進むと、ヨーロッパの国境とはどんなものになってしまうのだろうか。単なる語境か、或は河や山嶺などの地形上の区切りが変わってしまうのだろうか？長らくモラルの中心に据えられていた愛国心が単なる地域エゴに格下げされてしまうのだろうか？

\*

外国に出張する前はいつも慌ただしい。出発前に済ませるべきことをようやく片付け、前の晩になって旅行カバンのバックを始める。道路の混み具合を気にしながらリムジンバスに乗り込み、成田でチェックイン。飛行機が飛び立ってもまだ心は日本にあり、学生に指示し忘れたこと、原稿の遅れを断わっておかなかったことなど、こまごまと気にかかることが浮かんでくる。しかし日本を離れて3日もすると、日本が遙か遠い存在に変わってくる。一週間も経つと、大げさに

いえば日本という国があったのか、そんなところに住んでいたのか、日本語が話せたのかという気にさえなってくる。しかしいずれ帰国の時が至り、後ろ髪を引かれる思いで成田行の飛行機に乗り込む。ひとたび帰国すればあつという間にまた元のテンポに引き戻され、日本の生活が始まる。3日もすると再びどつぷりと日本に漬かり、逆に外国など行ったことがあるのかという気分になってくる。不思議なものである。

かつてドイツに2年いたあとも、アメリカに1年余いたあとも、帰りには深刻な悩みを体験した。知り合った友達やその家族は、なぜ帰るのか、どこが気に入らないのかと問いかけてくる。いっそのことそのまま住みついてしまいたい、こんなイ人たちとは別れたくないと心は叫ぶが、義理がそれを許さない。かくして涙の別れとなるのである。

人類の英知に捧げられる学問や芸術の分野では、もともと国境意識が希薄である。外国で発表された研究を取り入れて日本初の論文を書いても誰も評価しないし、ピカソ風の絵を日本で初めて発表してみても亜流の酷評を受けるのみである。創造性にかかわることは、やはり人類初でなければ意味を持たない。

国境のバリアの高さは、学問、ビジネス、政治の順に険しくなる。国際化の進展につれて、まず大学に外国人が増え、次いでビジネスのグローバリゼーションが進み、そして政治が最後まで取り残されることになる。

\*

個人レベルの付き合いでは国境の存在など忘れてしまっても、一人一人の生活や幸せは依然その属する国によって支配されている。動物はそもそも同類あひ集い、他集団を敵視排撃する本性を持っている。人間だってその例外ではない。それが集団が生き残る最善の知恵だったのである。猿山のボスのような小支配集団から、やがて部族、国家が生まれ、支配者が君臨し、互いに争いあった。近代民主国家が生まれ、支配者が民意によって選ばれる者にならしたが、国家は今日なお厳然として競争のための軍団である。国際協力や国家間の援助が、今日ほど実効を挙げている時代はかつて無かったが、それでもなおその本質は変わらない。ふるさと創生のための補助金のニュースと飢餓におのくアフリカのニュースを同時に新聞紙上に発見したとき、日本人である有難みと、国境のむごさを痛切に

味わったものである。

個人の努力によってもたらされる富や生活の豊かさより、国家としてそれを集団化した効果の方が普通大きい。どんな貧しい国にも大金持ちがいるから、勿論これは全体的にみた平均としての話である。戦後アメリカの豊かさに触れたとき、一瞬アメリカ人はどんなに猛烈に働く人種かと信じられなくらいだった。ところが、彼らは嘗々と汗を流して働く日本人より遙かにのんびりと振舞っていた。彼らは例えればブルドーザのオペレータのようなもので、のんびり働いても、数十人分のシャベル人夫よりは能率がよい。アメリカにはブルドーザがあり日本にはシャベルしか無かった。換言すれば、アメリカには国民の能力を発揮させる組織や技術・設備・資本の蓄積があったのに対し、日本には何も残っていなかったのである。

数年前初めて中国を訪問したとき、再び昔味わった同じ思いにとらわれた。かつてのアメリカ対日本の姿が今日の日本対中国の姿に焼き直されて見えたのである。肉体的には中国人の方が日本人より遙かに厳しく働いているだろう。しかし国家に国民の能力を有効に生かす組織と生産力が蓄積されるまでは、国民は苦しい汗を流し続けなければならない。商才を発揮して他人に先駆けて利益を手に入れるのも豊かさへの途には違いないが、やはり国自身が豊かになることを通じて国民が最大の利益を受けるのである。

日本も同じことであつた。目敏く利を求めて西に東に走り回った人も、自分の利の大部分は結局は日本国の繁栄によってもたらされたと悟ったことだろう。黙黙と自ら日本の産業を盛り立て、その将来を信じて株式に投資した人が最もその点を見抜いていたことになる。豊かになる確実な方法は、ひとり抜駆けを謀るより、皆の力を結集して互いに利益をまわし合うことにある。そのような力を結集する人や地域の単位が国家であるとすれば、国境は今日なお人々の生活を支配する重みを持ち続けている。

\*

見かけの違和感に基づく観境は、個人的なものだけに表現が難しい。人間は理性と感情がしばしば分離し、理屈では観境を超越しても無意識が別行動をとることもある。碧眼ブロンドの麗人と相對しても、あるいはカーリーヘアの漆黒のグラマーと相對しても、正直言って一瞬身構えるところがあるのは致し方無い。一種

の防衛本能である。しかし話しあい、付き合いを通じて、優しい心、思いやりの心のありかが判ってくると、観境もやがては意識の外に薄れてゆくものだと思う。

\*

信仰の方はもっと複雑である。かつてNASAで研究するためアメリカ南部のアラバマ州に滞在した頃、コーヒーブレイクで工具や計測員達とだべるのを楽しみにしていた。ある日あなたの宗教は何かとたずねられたとき、特別に信心深くはない程度の意味合いで、かつて字引で引いたことがあるatheism (エイシズム=無神論、不信心)を思いだし「I am an atheist.」と言ってしまった。その言葉を機に、彼らの雰囲気のがらっと変わってしまったのに気付いた筆者は、仲間の研究員に解説を求めた。それによると、atheismは単に無信仰に留まらず、既存の宗教の存在を積極的に否定攻撃する宗教上のアナーキズムを意味しており、安易に使う言葉ではないという。しまったと思ってもあとの祭りである。筆者は信仰深い人を尊敬こそすれ攻撃する気など毛頭持っていない。和英辞典を引き、それを鵜呑みにして使うことの危険性をいやというほど思い知ったのである。外国語は、聞いたり読んだり

した言葉を真似するのが一番いい。

信仰や政治ドグマは、他に強要しない限り単なる信念で、付き合いの大きな障害にはならないかもしれない。しかし余りにも信心深い人、強固な政治信条の人、生活上のタブーの多い人は、正直言って付き合い難く気骨が折れる。寛容な人、何でも食べる人、好奇心の旺盛な人ほど国境を越えた付き合いが始まりやすい。

\*

人と人の付き合いを邪魔する四つのバリア、国境、語境、観境、信境について雑感を並べてみたが、そのバリアの高低関係は人によって様々であろう。筆者の判定は表題に記したように高い方から信境、観境、語境、国境の順になっているが、読者の判定はどんなものでしょうか？或は第五、第六のバリアを挙げる方もいらっしゃるかと思う。あらゆるバリアを乗り越えるのは結局は個人の好みであって、県境を越えようが国境を越えようが、人の好き嫌いの感情はより普遍的なものである。自然体に、それぞれが自分の価値観を守ってウマが合う人との付き合いを続けてゆけば、その人数もほどほどに収まって、年末の切手代で大赤字になることもないでしょう。